

迷子にならないで

—避難所を出て行く子ども達—



【避難所の子どもとすたんどばいみー】

モビリア避難所には多くの仮設住宅が立ち並び、その様相は一変しました。2週間ほど前までは、避難所の前では必ずと言っていいほど子どもたちが遊ぶ姿を見ることができました。土曜の朝に車が到着すると、なんとなく、「あっ、来た！」という雰囲気子どもたちに流れましたが、今はしんとした、子どもたちの姿はありません。避難所は、一名の方を残して、全員が仮設住宅に移りました。

仮設の家々も静かで、ゆっくりとした時間が流れているようです。9時の活動時間が近くなっても子どもたちの姿は見えません。でも、どこかで小さな子どもの声が聞こえてきます。大資本のスーパーが、仮設住宅の横に出張店舗を出し、さながらひとつの街のような趣さえ感じられます。しかし、子どもたちが仮設で生活するとき、子どもたちのよりどころはどう変化していくのでしょうか。いくら仮設に移っても、親たちの生活が安定するわけではなく、新たな不安さを感じる立場におかれます。その意味では、一般にいう「家庭」での居場所が子どもたちに保障されているわけではありません。



避難所での共同生活では、確かに子どもたちの入り込む隙間はなく、どちらかという周辺におかれ、それでも子どもたち同士で時間を過ごすことは可能でした。そこに、子どもたちのニーズに合わせ、寄り添う大人としてのすたんどばいみーによる支援がありました。

本来子どもたちは、学校・家庭・地域という「力」の中で成長します。しかし、今回の災害によって、それらの三者のすべてが破壊されてしまったのが現状です。避難所の子どもたちに対しておこなってきた今までの支援は、少しでも失った「力」を穴埋めしようとするものでした。未曾有の災害を小さいながらに経験してしまった子どもたちは、いつも以上に「そばにいてくれる大人達」を必要としているはずです。

支援を続けてきた「すたんどばいみー」は、日本で生活する外国人の子どもたちが出会う様々な「生きづらさ」を、当事者である外国人の子どもたち同士で共有し、お互いを支えていこうと活動を続けている団体です。その意味では、学校・家庭・地域の教育力からは遠いところでの成長体験を持っている若者達です。そうした彼らは、単発的な支援や同情ではなく、日常の生活に重なる支援の必要性を強く感じてきました。

仮設住宅に入り、静かになったセンターハウス。やがて集まってきて楽しく遊び始めた小さな子どもや中学生達。避難所から出て、潰滅的打撃を受けた学校・家庭・地域に再び戻っていった彼ら／彼女らが、これから必要とするものは何なののでしょうか。「避難所支援」のニーズが消えつつある今、すたんどばいみーとしての総括が待たれています。

【意思確認】 修学旅行へ向けての取り組みの中で、万石浦中学校避難所であ会った子どもたちに、共通の基盤をつくる試みを継続しました。その中で今回は特に2点について報告したいと思います。

①「行く！」

支援の大人達と万石浦の子どもたちは、何となくであって支援が始まったため、私たちが何者で、どこから来たかもはっきりとは伝えていませんでした。「修学旅行」といっても、それが実現されるものなのか、お金はかかるのか、いつ頃行くのかといったことは曖昧なままでした。そこで、今回は今までおこなったことのない取り組みにチャレンジしました。それは「学活」です。

土曜日の3時頃、支援者の松永先生が子どもたちに声をかけました。「話しがあるからみんな席について下さい」。それから子どもたちが席に着くまでに、30分はかかりました。一人を待つと別の子が席を立てて外に行ってしまう。中には座っている子どもに外から靴を投げて、頭に当てられた子が怒って外に飛び出すのをおさえると、今度は泣き出してしまいます。やっと話を始めると、今度は話を全く聞かない。粘り強く松永先生は話しをしていきます。

子どもたちのムードが変わったのは、一人ひとりが参加の意思を確認されたときでした。「〇〇は行きたい？」と聞かれると、みんな「行きたい。」と答えました。もちろん、何か心配ごとがあるのか、迷ってから答えたり、もじもじと小さな声で答えたり……。子どもそれぞれでしたが、それでも全員の意味確認ができました。野球で参加できるか心配される子もいますが、8月のはじめの週、泊まりで修学旅行に行くことが正式に決定しました。……。初めての話し合い、歴史的瞬間?でもありました。

②何となく修学旅行気分

日曜日は朝から雨。参加者もはじめは2人だけだったので、渡波小でおこなわれていたお祭りに出かけました。お祭りは多くの露店が立ち並び、NPOが多くの炊き出しブースを出していました。雨の中とはいえ、多くの人がどの店にも列を作っていました。一緒に出かけた2人の子どもは、5人の大人を従え、まるで若様のように……。射的に興じたり、お腹一日に食べたりと大満足でした。



でも、戻ってきたらビーズや、糸と針での名札づくりに集中して取り組みました。おかげで、修学旅行の看板はついに完成。子ども2人だけのミーティングでは、子どもたちの名簿の作成と、保護者の連絡先を私たちに教えていいか了解を取ってくることを打ち合わせました。ぽつぽつと子どもたちも増え、最終的には5人のメンバーが集まりました。お母さんからは、「すぐに帰ってきて」といわれながらも、もう少しもう少しと粘る姿も見られました。

そういえば、土曜日の夕方には、箱根の人たちによるラーメンの炊き出しがあり、お腹を減らした子どもたちは、お家に帰らずに炊き出しに並びます。そして、なんとなしに教室に持ち込んで、みんなで食事タイム！それは、まるで修学旅行の一コマが、早めに来たようでした。子どもたちにとってこの空間が、だんだんしやすい場所になってきているのかもしれませんが、でも、夕食で呼びに来た母親にお小言をもらう子もいました。結局親には何の連絡もせずに、一日中居つづけた子どももいました。



【支援＝支援者自身が変わること？】

先日、東京理科大学の学生でこの支援に関わっている学生が1人、私（清水）のもとを訪れました。「どうしたのか」と聞くと、「万石浦で、どのように子どもとかかわっているのか、どうしてもイメージがわからない」というのです。彼は、大学卒業後、一般企業への就職を経て、あらためて、科目等履修生として理科大で教職課程で単位をとり、教員を目指している学生です。アルバイトで塾の講師もしており、その様子からみて、「教える」ということにある程度慣れてる様子もうかがえます。また、その経歴からして、教員を目指すことへの意気込みの強さも感じます。そんな彼が、「子どもとかかわる前に教える側としてはイメージをもっておきたいが、考えれば考えるほど混乱して実を結ばない」というのです。私が伝えることができたのは、「塾」という場と、「避難所」という場では、「教える」ということの目的そのものが違うこと、加えて、「避難所」という場で教えることにおいては、目的設定から支援者側に委ねられているということ、だからこそ、この場に関わる人々がその目的をめぐるいろいろな模索しているということだけでした。その後、彼は「考えてみます」と、来たときと同様、背中を丸めたまま悩み続ける様子で去って行きました。

そんな彼の後ろ姿を見ながら、強烈な印象として残ったことは、支援する側が、今までの自らのスタイルを変えようとしていて、それには当然のことながらある種の苦しみを伴っているということです。今までのやり方が通用すれば、そんな簡単なことはありません。しかし、通用することだけを繰り返せば、広がりのある対応はできなくなります。支援を問えば苦しくなるのは、そこに支援する側の変化が求められているからなのかもしれません。

こんなことを考えていると、支援を通じてお会いした理科教材の営業マンの方にも、あてはまることだと思いました。先日、理科教材の支援でお会いした営業マンの方は、長袖にネクタイをしておられて、汗ダクでした。節電対策中ですから、そのスタイルには無理があるのだろうと思い、「会社ではクールビズは推奨されてないのですか」とたずねますと「そうなのですが、どうしても、自分のスタイルを変えられないんです」とのことでした。そう話されるその様子には、ある種の苦しみが伴っていて、「変えたい、けど、変えられない、でも、変えたい…」とグルグルしている様子でした。

第7号で、「盛り上がり≠継続」というタイトルを掲げて、支援のあり方を検討しましたが、その先に見えてきたものは、支援とは、支援する側の変化を伴ってこそ、支援たりえるということです。

【今後の支援の予定】 6月27日現在

■7月1日（土）～7月2日（日）の第14回支援（4部隊構成）

土曜日午前：小友・広田中の支援物資運搬

終日：モビリア避難所の子ども学習支援（すたんどばいみー）

午後：万石浦中学校避難所子ども学習支援

日曜日午前：モビリア避難所子ども支援（すたんどばいみー）

終日：万石浦中学避難所学習支援（夕方から早稲田テディックと合同）

【ご協力いただきたいこと】

1. ご提供いただきたい物資

※夏の季節に向かって必要と思われる物品の提供をご提案ください。

2. 同行していただける方 ※参加可能な週末をお知らせください。

【ご協力に感謝!!】

■今回の支援隊のメンバー（21人）

柿本隆夫（引地台中学校）、家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、金子尚弘、松永雅文（大和市特別支援教室）、荻谷夏子、富樫武司（大和市農政課）、石川和友（大和市国際化協会）、佐藤洋一（三省堂）、添田絵莉子（千葉商科大学生）、すたんどばいみー：西岡歩、大城グスタボアドリアン
今井美里・佐藤岳也・甘利悠貴（東京理科大学生）

■小友小中学校 ①支援物資の提供：理科備品、保健室用品）

■広田小中学校

①支援物資の提供：理科備品、事務用品、保健室用品、バレーボール

提供理科備品リスト：アネロイド気圧計、アルニコ強力棒磁石、示準化石標本、セメント抵抗、発熱実験用電熱線（2Ω、4Ω、6Ω）

■モビリア避難所 すたんどばいみーの子ども学習支援（2人、2日間のべ7時間）

■山十（教材業者） 理科教材の搬入手伝い

■万石浦中学校避難所 子ども学習支援（14人、土・日、のべ14時間）

■ご協力いただいたみなさま（敬称略、順不同、物資・寄付を含む）6/18～6/23

石井良輔（引地台中学校）、小笠原広美（アンデルセン保育園）、竹中亮子、大野かよ
チェンソッキム・デップソバート（Ed.ベンチャー日本語教室有志）、工藤美知子
五十嵐康子、高根佳子（東京理科大学）、株式会社スタッフ、ヤガミ（担当、藤森大輔）

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援（エドベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン）

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

